

小さな花を三、四輪細々と付けた鉢植えのシクラメンを妻が買って来た。十一月中旬のことだった。定価の半額以下の二百円だという。どうせ無駄買いだ、と横目で見ていた。

妻は、何ごとによらず可愛らしげな小物が好きだ。箸置きにしても赤毛のアンにしても何の人形にしても、小振りのフィギュアをおばさんと呼ばれる若い頃から集めていたものだ。

よく見ると、如何にもいたいけな姿、それが妻の心を捉えたに違いない。

## 「甲斐性のある存在」



聞けば、永山グリナードの花屋さんの店頭で買い手に見放されて売れなくなった代物。それでも他のシクラメンに比べてかなり小さめの楚々としたその姿は、妻の眼にはひと際可愛いらしい。しかも今にも萎れてしまいそうな花鉢を前にして、このままでは駄目になってしまふ、未熟児みたいな可哀そうな姿にどうにかして助けてあげたいという気持ちになつたらしい。

翌朝から気になって仕方ないのか、窓際に置いた鉢を覗き込んで、周囲をすっかり覆っている葉っぱの下に潜んだ幼い花芽に触れて、その数を確認している。

手間は水遣りと肥料、そして陽光に当てる。水遣りは二日にいっぺん濃緑・淡緑ツートンカラーの葉っぱを持ち上げ、鉢の内側にぐるりとたつぷり注ぎ、肥料は二、三週間にいっぺん錠剤を鉢の内側の土に置く。あとは、室内のカーテン越しに陽の光を浴びせてやる。

一週間も経ったか、花が八輪になった、ほらっ花芽も増えてるなどと、

嬉しそうにしている。

妻の様子を見てみると、いたって簡単な面倒見だが、たつぷりの愛情を注いでいるのを感じる。単なる愛玩用（観賞用）でなく、未熟児を育てようという気持ちなのだ。

そして、やはり妻の手に預かった未熟児のようなシクラメン、手厚い面倒が効いたのか、一ヶ月もしない内にすくすくと育って、その数が二十輪、当初の五倍ほどに。見るからに鉢全体の様子が一変。鉢を覆う幾重もの葉っぱのポリウムがひと回り大きくなった。そこからすつと立ち上がる二十本の茶色の茎。その先端には、深紅色の花芯を包んだ花びらが白いフリルを着けて、脇から差し込む朝陽にまばゆいばかりに輝いている。

面白いのは、五弁の花びらの内のひとひらが、ひっくり返って下の茎に巻きついていて。二十本の茎に付けた花弁がすべて、そのポーズ。何か意味があるのだろうか？宿題をもらったような気がする。

それはともかく、今や、窓辺で愛らしく立派な観賞用となった。ところが、ある朝、あれほどすつくと立っていた花がすべてぐつたりと外側に向けて倒れ込んでいるではないか！葉っぱも力なく外側に垂れている。

水だ。水が足りてないのだ。わずか四、五輪から5倍の二十輪が増えて、当然ながら二日に一遍の水遣りでは足りない、毎日必要であったのだ。「ご免、ごめん」と言いながら妻が水を補って二、三時間、花がいつせいにすつくと立直り葉っぱも力を得て外側が張り出し、元気に戻った。

それから、ひと月も経たない内に、更に花がぎつしりと密生してきた感じがするので、数えてみた。

何と、四十輪！

購入して数ヶ月、いやはや、買ってきた時の十倍。立派な姿のシクラメンに成長、頼もしい限りの存在感を放っている。

心を尽くせば応えてくれる「甲斐性のある存在」は傍で見ている嬉しものだ。